俳風新多留 四十八編

へ9
1147
43

43
へ 9 特
1147
43

宮内省圖書寮

川柳の庵ちつく法
君子自ら高やうなる
蓮を生つみのひし
風新の句を見る事
こゝかのを手技声を
いとんて員ありまの

君がよしの御かた
なほ〳〵えねはかれぬ
すじを　夢裏の筆よ
　　とゝめる

柳ぢ十七

辰の春

壽露評

中巻のもくろくは神しるん　薮塩
内氣は八仙洞裏をゝかゞり　蓬東
世界にすると景色の美はさめ　箕山
こゝちよき海を枕に山を尺蠖　豊樂
姿勢と法則は天象家宸殿　孤雲
うねくを登り初めは溪水　万仁
白波よりもるくまを七色　有幸
淡々西風ぐ古の名とのこし　磯川

昔の沿革を尋ぬるに竹芝尺なり
柔と曩字沿拾遺よハ出のこ
ハ屋ムいつらんいこ後けあ子
白服くてよハ結さ山の国東部
活イ絡紙イ未孫尺ちゃ紙
神ヶ孫ヶけよ密樹沿雲上ヶ
き年を共日くムくハ男
延波やく秦の始皇此掛沿ら
いで仕ますと西多へもれてる

一

佐川
シイト
里松
笑語
芦束
玉束
香貞
玉束
孫川

さつぽりと曹操尋沿
孫呉ムハ裸よ敵ヶ下地
百ヶ口ヶ有る以我奥家ヶ対ス
庫孫ハついそ海このたヶ如所
孫ムハ蓋紙一挺研ぎおくし
いよ仕を中ヶ中ヶ西の博ヶ答メ
武の内茅イと評乃つヶ男
ムハくまヶ奴浦波ヶ渡人
弦ヶ者の叩ハ徳光る

香貞
菱襲
一法
撲好
老光
ヤマキ
玉束
巾布
一法

雲を深みかくれ奥山の陰
門松の望みとすれば秋田杉
明かれば信濃のあくれ新
挑灯の燭の庭へすくられ
回車かくれぬをまるあくれ
まくれ南天の赤さ好人
よくつもるくもの雪のせいと立の
おんなのいろわざ帽乃廣く
岩高乃梯子ちやげるやうよ

里物
ヤマキ
巾布
梅多
ヤマキ
原川
笑浩
兎花
撲好

文日堂評

くちちくくも海を横よ山を見る
素晴らしい白雪の雪の美
仏宝殿三四一ちびへ高新
雲の教高とのなどう風の峯
松葉の遠ひ蓬よ来ん
白い幡よ一字連ひのを見兎
雪よ梅くさ山松子は目ゆ記
菜と芸字治拾遺ゆ出のし

芸栄
笑山
千之
芸山
梅多
笑浩
芸禾
ミノト

夏を送く孝子ハ出うかゝり世　一徳
孝を尊ぶ日てくゝさて男　香奠
けんぎやうハ夜ゝ汁ヵ出来る物ハ人　玉素
強ひ酒盛ひ末酒ハ人とゞ発る　長米
吾口のまゝに成真氣がつゝ　一泡
素の代よ廉乃いうくとんぐる　笑玉
玉姫ハ亦ト思助ハ内ゝ居教　老色
元を祝め矣南を内ゝ喰ひ　月物
入乃ゝ毛ひたくて居る石人一首　孤雲

芸をとそう世ゝそわくのと生て刺り
海を見ゝ新田勢陳成ゝり
儲合の宗とゝ初ゝ流ゝ母ゝ
演芸てゝ揚枝を武士つゝひ
挑灯の物ゝ庭ゝ居くゝられる
見元ゝを開く海て首尾ゝり
初ひといふ者の居る所物
田南ゝ初ゝ母ゝ安ひ
来料ハサヽナ弱髪リヤヽ黄ひ

巾布
玉素
ヤマキ
月私
橋名
夕夕
横好
ヒヽキ
横好

鍛にてそられ去侍る事よりくり
返筆ゝよキヤとゝいひやる此歌柄
三月ゝ末てゝ日れ鶯よ世ゝ出ぐでき
世廣もまえの一ト出来ハ姫うちより
加の道乃淺ゝもちる天下一
秋一ゝ世ゝそつばんと毋日けー
おりゝろひ世ゝ巨燈やゝ下
ゝつゝゝ地蔵のけつをゝやり
味ゝ道ハ去ゝ取為出来の不完先

万仁
一流
清門
孤雲
素象
茅義
樸好
樹香
一徳

川柳評

清順ハ時雨よまゝる義中ゝ至　一流
楽柄の掠ハまぎれ出来柄　仝
第ゝ浮ゝる字浜拾遺ハ出のゝ　シヲト
かゝゝゝやゝゝ業の路見ハ拘ゝ　玉章
駿河町あづちの世ゝよ不二ゝ人　里梅
大王も俵をゝ入れるゝ為　礫川
清盛ハ仏の九先ゝまゝゝハゝれ　里松
入道ゝ毛のはゝくゝる百人一首　孤雲

武の内ゑいと評乃つく男　武素
いざ宮が命ぜられ国敵を　葉川
女のもとへ入れ太お奥して仲の町　仝
金箱のつゝぬい本地のいく婦　ヤマキ
汗ッ桐答びく鬱こつ〜むし　孫川
対平がこゝろ知てんまびく　番員
大根武者人参よりも丸の張サ　巾布
けんぶんや亭主いらぬ是話　仝
不風流金こゝろく前ワキリ　武素

蓼の代お蓼ぬいくとんぶる　甚五
ゑ以後家和尚志ばくなもん　子之
大海ゑ武でゝちんハこゝろ　書員
鼻油はけ〜京ぶる後の弱　葉川
を子薄夫ゝ根津の大一座　ヤマキ
眉ゑ〜ゝ主の女房ゑや寄さゝ　葉川
ゑまく弟女ゝとむきゝやゝを　ヤマキ
きるこゝやの本ゝ主平ゝつこ　炭屋
ゑゝくまく梵ゝを食ッさ虎ゝ血　板屋

[illegible]イトゥちはいはの〜[illegible]ゆる[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]く〜ぎつく〜ちこねよるうんうやくや　樓好
[illegible]んこ身の如い中ゆ帝ト能光る　ヤ一キ
みきんなく　却くぶつくちや仕西人　一流
中宗秘こ[illegible]人り面[illegible]　千之
島子[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]く[illegible]帰う　碓川
味噌すの鳥[illegible]　百　ヒ邪　ヤ一キ
[illegible]ちやこひの井こ　蟲ちハるとこ三　樓好
下女[illegible]ぶ小椀をかりたとい　ニシノト
[illegible]

北面へ切ちハかんきを落るとぐ　ヤマキ
いさ〜叩なるゆも汚ゆする姑だぐ　久蟲
ぐつこめが下初ゆこ充氏くやぐ　ヤマキ
[illegible]ハ一ゆく二家ゆのらき　仝
何海く追樊よ下ゆかくり　蕎山
小使ハ向ノへ走なこ　柳　正　里松

シリト評

伊達なるゆきよりぐいさんあり
そくすぐをたほしぶちる里へ行
山吹ハどの屋かそねをトてへ
初茶をちりたてまゐ湯牛場
千ゝ下紙ゞ白イ紅葉の恋より
色号の恋ゝ濃まて麻を切り
ま舟のゆもおかしく外記さき
清良へ多もたくさし三ちめ
金混を舟日のぶすいく箱や

万仁
青嶺
雨夕
青理
砥川
里松
小産
青嶺
梅雪

千恵秋評

花魁のまつしく蔵る清麿物　青嶺
書キ方の力を柳ごうかゝ紅うへし　笹丸
お屋さき切をはしくつんのぼう　砥川
一帖八畳よ光るものがゝう　仝
赤湯小ちゝ多まねく清田扇　仝
うゝ屋ぐく琴ゝとまゝぐるはかゝと　ヤマキ
紙の礼ゝもそゝかゝむ風北糸　砥川
二日只ぬ月ゝ小巻の咲く仲乃町　万仁

士イのゑハ久方すも袁袁ゑし　碓川
いろ屋の雪籠よりおゝ乳母いおもいくゝ　梅香
ゆるゝ　ゆこ宮の味ハ志ゝ奴　母　横好
内裏遠賞　押入と明ゝ　ゝ　見楽
角田川どつと笑れ舞ゝ　ゝ　ヤマキ
逆江どろが　穴めと添ゝ　ゝ　万仁
頼字とゑんぐ日本の地ゝ　端ず　見楽
多墨彩ゝ　光明ゝ　三舎目　ミノト
振油の地命世命をおゝんでゝ　見楽
柳屋四七

まぐ咲ぬ梅のゑを毋見兄　ミノト
春の歩を梁国ゝ歩歩　ゝ　全
歩よもちゝやごとゝぎ茶ゝ　其山
梅のゑ似ゝ　ゝ　高歩ごゝ　里松
ぬぎ見ぐ埼ゝを見五市九　新意
汐松魚賞ハ猿ゝ　ゝ　横好
屋ちまのゑでゝ　ゝ　新意
家侯と功よして張る者下り　和花
粉川の蕪ゝ　ゝ　ハ義侯長　全

出るとなりぶらわる瀬戸物やの婦　　磯川
討死を日ごろ思ひよする僕釈師　　瓢重
世盛のなれハ愛子の和よやけ　　ヤマキ
北国ハもり屋をくるする所ロ　　仝
きつぱりと志ていのさと与吉云イ　　磯川
俗度禅をくもすると有くく　　仝

文日堂評

所名白与嘯まで行ん時名　　箕心
和かんの安ぶら与敷の沐琴紙　　玉素
仲四十四人

内裏造営神ゐれを始ケ日ハ
素のきびく家士を打くに陽ひく
命日に生てでるの命をと
四と答ケ乃イ〳〵流る家士の雪
うこん紫ハ沐浴を面ぐ出来
萩を庫庫と行ふ〳〵ふ素人の
松の第理樹〳〵の長る撥北礼
若人の為る返中ゆを毫おらば
表具の数十九年紙ハさせる

髭果　　仝
里松　　香夏
如花　　瓢童
　　吉張
　　玉章
　　如雀

むでいふ橋の徒歩に拵ふ
冨士ぞろへ書ぐらべつまる和さ
名いまひは拵こつまるこの所る上ち
拵河の手くに見長大ぞ多
菅谷より新宮の所くに長旅屋
書よ出くる河をかんをとあられ
名を拵ふくる出たるつ金目
きついる二度目を第ぞ
隅田川がりと知れ舞はれ

拵屋十九

兎宋
里橋
シクト
蔓書
一徒
市布
シクト
里松
ヤ一キ

恵ざれる和尚こ河をう遠ひ
屋んちきを越をとを書くを傍屋
第ちを文でせぐをを依でいを入レ
赤人の亀に懐地きりいる
陪書ぞよとを屋人へ指とを
くぐいてを書んをを多を本地姫
白河は義白に注ひだとれを集
天寿をいきるのををぐ深ぐ
鶯口の書はきをる安学屋

仝
如雀
仝
二松
撲好
友喜
一徒
凱重
香臭

江戸では三角系統で撰抜を出
三文も祈〳〵で百姓の指案　武士家　万仁
出人すして此高ひ又ゑ両　如花

川柳評

物の臭〳〵芸イ風さ〳〵あてぬ清代　青秀
絵キ形と系図もする妖此礼　孤雲
天人も庚人も来さ清見浮　青嶺
六割半も此のるイ鶏をかい　シント
拙作書とる取も里の青熟之　碌川

御早四千

紫の代の福八日本〳〵吹よ世新　一徒
大名もよだらあ〳〵〳〵紫を黄人　黄援
玉南乞たんそくとて鼻をかと　碌川
黄色のかる乞乞よお乳扱い手イ　梅香
伝言の母衣を撰形みぢ〳〵　青嶺
鶏和子家安倍のこもちで　仝
中国ハ形ほどさむくなる右　ヤ一キ
うち乞を日黄色りよさる清秋師　翠亭
出ちるなと也母る二人り黄見人　青嶺

蘆雪りうばうくうだいやたぐめる　　里松
子ほ拍弟もたぐをばぬきぬひ　　仝
射義はとナニまぼもいどみ合イ　　雪峯
くどいてもけんもりうを丹地蜂　　菱喪
弟姫く蓄ふかくまる指ひろい　　孤雲
角四川どつと笑いれ聞ことれ　　ヤ一キ
道はどろぐくめを添をしやがう　　百仁
野川ぐ荒ッかぶりを義伝兵　　如花
そば接ぐふれくうと麻をれり　　蕉山

柳平四十一

青ふのとゆれくくこまる西は麦　　孫川
おきて人つ痛くくろつぐ手出ふ物ゆ　　柳角
かん渦とやくくおやくきちれくこと　　孫川
鈴かくう迫ふくまるくもやちこだう　　巾市
ぜぐんの子女をぜとおばくくうあ歌　　里松
芋ことくいくく屁のやくで紙イ侍家　　麦窮
母兄ふハくくして切る屋ちまあ　　孫川
一下色狩ふ切ッくをドかかぢう　　里柳
おくく方もちの手ねねふるうらくき　　瓢雪

ヤマキ評

同おたきハ子代をめてる法師地　万仁
はんぢうやいろうで其のたん方　玉素
三国地二を宝永よ春おとし　玉霞
多賀を出キ行る法三年の八ツ　三松
武蔵国を歌あよ表す二度の月　玉素
一日ふこうやふくのぢるいく法師　里松
琵琶の曲りをゆるて立ぶまり　三松
西行ハ鄙の笠を見ぬ半ち　仝

柳ハ十ヒノ十二

三熊のうるぶしいのを婦ハるけ　里梅
三国一の大まを梅乃花　梅香
六郷をぶづうよこくる二年め　雨夕
長子はきこ和歌のちて法をつけ　巾布
八幡よ上覚あれ〜ひ〜き　青嵐
それ小袖光りのどけき妙の秋　徠川
家ゞ勇メハ笠のちる赤石の南地　一徳
いろよ〜しき掛と知るう、美雁　呼川
かりけゞ掛れく梅のむぶちう　見楽

須ヶ浦笑一歩を思ふ哉　楊谷
月如鯛をとる万あく加い消メ　礫川
挑ちぶと笑ふ人たとどゝ伊万　玉泉
鏡服よ鏡をとゝくいやや尺る　玉泉
指条姫山下もちゝ家君之　万仁
ちゝんぐをわよハさヤ奴下如者　仝
代りの乳母ハ森新よいとあゞ　蟾門
茅と背よ尼用るゝ武蔵坊　万仁
人を仕ひくゝ家鍋ゝよ猫耳ハ　玉泉

七ようやつゝ服装よゝくいこゝ　長楽
わ子芝居人丸どこゝ森ずこゝ　如花
富士の芝ふぐづれくゝ方拾テ　礫川
も尾生ゝの初りハつとゝ　里楊
いせゝトハヤヤ面でべゝぐゝ　撫好
鉄槌の行方知れぬいやな意味　孫川
森孔の髪多かゝぐむゝびあげ　手賀
毛ぐつゝ髪ぐはてゝゝ森　玉泉
茶の茶る問ゝも誰ゝ居ハ　三松

却の法をふんだりと女房い？　碌川
妹をふみ處はとゝ〳〵ゆ〳〵とり　仝
居はゝ〳〵ゝゝやとおうんきん　仝
爰の通り出ムと女房ゆ　ふんこ　仝
かつくまるの日二味せんて酒て　こ松
ばんまやくだこづ　ふいとゝつよ利　青露
紙幡よ入るとゝ　ゝく下女　思こ
酒屋を屋ゝつゝ　ゝゝゝゝれる　茂城
出宝子ち作の名画ぐ　弟いせる　万仁

青露評

公八松文武ふ日ゝるよ　青牡
清瀧ちふ杜丹ゝ　ゝ八ふ事　巾市
妖の新まで　桃文ゝ　撰好
露とさけ光をてゝ　ゝ　孫川
清ゝ身出名八　描書ゝ　里松
一を切ゝ百武　深ふ　孫川
半ふる家ゝ　ゝ宮ハ　万仁
九拾日と二ヶ　ふ切ゝ法　久露

其中ハ万年の翠ヶ新て
天神も毎年戈を清大祿
志の江戸くもけふ水ぐ枝ぐ咲
出代りの乳母ハ庫新く嫁ぐ
桐ハ鳳凰巣ハ檀ふハとんび〳〵
新改と与市扇子で居ぐ
鼈甲と伽羅ハ業平の冠
ひんこ名産ハ西里方
徒子ハ風よ巣〳〵風を上ケ

一徒　其正　西夕　清つ　雨夕　玉章　こ松　甲松　一徒

神武七ノ十五

よごれて新を又岩でどこ迄
重宗が新姑ハいやなるもち
家ぐ心ふ連のありやと鴻巣川
妻ら兄馬場ら言ふ男ちち
西河岸ハ天人天井より高る
千社札天狗の面ぐきついて
猿之を遣く沢子特
いうふ久〳〵ものと知る上ケ
汗〳〵の素戸ノ牧仕ケ〳〵拙

其正　碑川　吉牧　玉章　巾布　碑川　清つ　碑川　如雀

拾遺る人のなかに堂へぬ初松魚　五素
叶こ言葉はきいハ大根のぬ果と芋メ　西子
貴の行る礼をつゝまる係う毎　仝
翠と芋ゝ居人地面ゝ深ぞよいる　如雀
下ゝの鶴笑とゝてゝとゝ　孫川
大社屁ゝの神ハ来ゝ　百仁
法樹のもゝさゝ　孫川
今ゝなられぞうんのいろ書の風　如雀
丸山ハ伊久ゝ　子移

野ふゝもとゝの分くゝのハ面白し　孫川
鮫ゝとゝ孫ゝ入るゝ乃ゝ下女乃ゝ　素雀
市ゝ子晩ゝ人ぶゝ嵐ゝ化物ゝ　市布
つゝゝ黒扇能書をゝんでゝる　孫川
お合雷屋こゝぜんゝして亭ゝゝ　子移
屋の徳先嘗茅くゝ見　世素

文日堂評

御八國作業ゝさゝゝゝゝゝ　一徳
ゝ智ゝ出ゝ行ゝ浜二舞の八ツ　三松

師匠の名を書もらう

知ぬ人とあてに花形の花

鬱金甲と伽羅を下ふの當麻

帳幕のさうどう毛宮が姫ひら

雷りと華(ダイコ)所に連て出通ひ

為り恵摘と所るのが面白

寄の初言にわれ宮を吹ケ

桃の出所息子ら菓子代袋蜜

庫がいきめば死の菓子御

折詰十匹七

里松　孤雲
こ松　こ松
全　撰好
万仁　玉乗
一盛

ばれぐ菓子実しやふ后ろ屋

一ぱいのおかゝの撰ちゝ

出ぬ八重のトで死ぬ人

家ゝく泣ゝ長ゝ材木が群れ

松ふ所る毛二家けんぐゝさ

園の初まさく陸まる紀い初金之

きよゝかゝ桃を新のおで見る

恵うぎつなくあ家形をうかゝ鶯

新見せゝ見ゝ二作で恵が如来ル

如意　全
シノト　赤貝
紫花　撰好
如花　シノト
全　如花

伊勢に女軍をつくらんぐ
又軍と車力と盃毋をとり
性らい者くり〜何れ義まし
つぐ〜に西の後りと屠りを学キ
伊が者う率ひ集へ多門ときき
出代りの乳母ハ雇新よいと名元
百姓さら腹伊世神で大一座
あぶ桜西行及び鳥子及新
せいろ〜でうり〜京及出と世

こ松
西夕
樓好
梅香
樓好
婚門
書表
武家
如井

梅四十七十八

こつ子字牛北角子家姫初り
源氏よ西流の歩り初ろ歩き
畑ケと肉の番人を如しこ
元をわらんで味噌漬と拵て
胡椒に添く続を伊勢屋及る
新の酒盛くかり川くくられ
後ケ如西源家ろを一段昭元かり
高子前酒が好キうと広用学キ
如んぐ〜も縄目よ及ぶ子丁町

巾布
こ松
如西
ヤマキ
武家
ヤマキ
梅香
仝
武章

時雨降つゝ八十根丸の朱と変ず　西久

為めに急と雁うち法ひて可らまる　岌援

指来嫁叶下もなれ笑ふ　万仁

川柳評

結好さ言葉縁が五百坪　素雲

馬上で八嫁もとさぬ家居　横好

抱腹月もろとも漏もなし　素雲

六月八日やく過ぎ御歩上　一雄

初ろつくも大てのもの笑ひ命　玉素

柳四十七

多習を出キ好るに二丼の八ッ　三松

姫上も扇おつとり清涼見　素雲

隈毫の曲もくも湯もとまう　三松

概莫の虎落えと中酔来ん　素雲

半ばる笑うく言ハ義ふ　万仁

仲の町間八文字ハ如命　巾布

掛り枝よ雪ちんぐ長イ節シ　素雲

雲をさけ出をとこだめる雲　徠川

雷を幸既よつれく涙面ひ　三松

高砂ふけれのいわやと隅田川　まつ桂
紅葉り大名ぐさくまあかされ　玉すき
老せハ大イの京ありて初めおぼへ　妙玉
神國をやりと花んでく君眞堂　シラト
なまこいつよ長子濃るぐよあへず　碓川
四ぐ〳〵る木やりをもる絶れ芽　妙寿
且用を結ぶかこい〳〵さきんぢる　撰好
陳新所涉を義ぐしてきおし　ヤマキ
鞠屋ハ高ん乃下みく金ゆ上け　箕山

所見十七廿

富士の美山ぐもづれくさ分撰　碓川
笑ふく来る内二味やんぐ紅いそ　二松
二度ちらやぬよ釈文どくよづう　碓川
なまこいぐみそず泥ぐくる　小侍　仝
姉よ実ぐのれば妹よ実ぐ咲キ　岩坂
せいろうぐうう〳〵と見を長う　妙花
廉婚ハ地ちの位吉ハ如命好キ　玉素
ひきて芸長人九ごとう集ぐ長る　妙寿
月結ぶ新屋のるさ衣を見せらしか　碓川

吉田町 拵を女房に かけ
くるへぬけ もとのせい地帝へ　ヤマキ　玉章
毎度が毎ぬけなつゝぐ 悦御　清門
御地てらちん げ 腰ハづもづれ　玉章
重げ ぬけれバちんのいれ 墨の紙　如雀
七屋 生 拍 初りハけやゝまゝ ゝ び　里梅
拵 系 ゆめ ゝ ゝ下々 もなきせゝぎ へ　万仁
万男と 初 ハ 亭 も ゝ こ せ　清門
鞘 母の 紙 拵 を つ ゝ で 吉 ゝ し　楽川

清盛評

黄金八張(ハリ)のまゝで 陸奥 上　撰好
不まれ 有る 和 猶 ゝ つ ゝ い 三 ッ の 弓　玉章
帝 を ゝ て ゝ ゝ 日 矣 橋 小 弾 帆 へ　一徳
はん ゝ ゝ ゝ さ 江 戸 の 踊 で も 拵 ゝ　香貫
玄 粮 の 売 ハ 千 ゝ の 味 方 な り　吉地
三 ッ 段 と ゝ 亦 和 漢 の ゝ ー い 去　皮鼠
屋 つ ゝ け の 拵 具 を ゝ ぬ け の 芸 ゝ 妻　玉章
拵 を 帝 ゝ の ゝ へ で 旅 や つ れ　久義

人を来よして山門へ行つのり　　松雀
とハ知ぶびよやたすけよや梅指よ　　巾布
そこでりを切れこかいらん下知なる　　三イト
かげがしらふまへたがるがんぜなる　　万仁
五条のうハ方でのみやこん　　筑好
子かぶびさまやゆを多ふろ　　久蔵
どなへもこしてのぎる三合用　　孫川
小松のさまりかげんよ用をねもり　　ヤマキ
よくいる番様まへふーをかけ　　玉幸

一をきし茶やを初る先なり　　巾布
三ぐでり羊へお松どの番たろ　　無山
ぬふ信をどうれくの俗り声　　孫川
如をで行金の日れせと居れ居ろ　　仝
すてつれのかハ号疫へ昆布するめ　　仝
よこちつぷりをたられる先ふる人　　香夏
つゝまよおしさ行さを下如知い　　樣好
俗ぶつさ鮭よ紙子の味をつけ　　孫川
あしあいろはで如帝黄い名人　　仝

川面の水を二人ぐらやアぐり
くゞい水へ引たまり下女はゝみ
懸よも下メさゝ水ッてる毋の紋　孫川
姓ハ形ねゝゞかゞ袋の内物ニ　シゝト
つけ根迄えゝる毒の一ツまへ　桜好
　　文日庵評　　蓋山
あゝ川の板船を引ゝゝ記し　孫川
姫皇帝乗のゝ人で旅つゝれ　シゝ木
よくありがすゝねゝ風雨平云ィ　久嘉
　　柳ゝ千也ノ此三　里松

てゝたの手渡ゝ也て漢ゝ板船　ヤマキ
ヒハ船ゝずゝゝやゝ物ゝゝや橋ゝゝよ　ゝ布
茶の山ゝゝ毋ゝ船ゝゝくゝゝゝゝれる　平孝
建ゝけ反地下ゝゝ毒ゝ船ゝ留ゝ深ゝ　友嘉
あいゝゝまのゝゝゝゝゝゝく夫ハ組ゝゝめ　平孝
よくゝひゝ毒ゝゝゝゝ極ゝゝうけ　仝
和ゝゝさ望ゝりたゝ板ハ富士の山　一徳
加ねの弓ゝゝで加ゝけゝる面白サ　蓋山
おもしろさ一のゝゝゝゝをかいゝゝ山ゝゝけ　友嘉

けだ〳〵の毒よ我迎あてられる
四うれいよなれハ平安を白しん
爲をえせく酒をうる百姓ち
ぞう〳〵とそばやへそいるぼ十七
つまゝねへその吉原の鉢ざゝら
姫子の子を植うゑるあやめ寄
三くでり半へお松ぢの岩方寄
を縁上義をひすぢの角平
一人り男る新子ハかいたえまりと

ヤマキ
松産
仝
巾布
シノト
樣好
箕山
里松
和泰

祈ぼ七〳〵七七

ぢつこめが下知ることを所くやぢ
横そつろうをはゝられる九ふるい
個とすんで遊樓よ下女かて足
あつまゝ惚られるのハちぐれ鑿
居ハ二八一つぐ二度あるき
くつハやハるの寄りなへ神酒ゝのげ
うばがおだれ廣樣ハきついす
名よずおゝずすあらあるはゝぼ文
ゝぐいが下へあたまり下女ゝゝみ

ヤマキ
香炎
箕山
玉藻
ヤマキ
雨夕
梅忠
香炎
シノト

炎天で逆上せ度切りゞ姫ころう　青蘭

川柳評

三ヶ不ハ賛大の表閑く反故し　青理
市自分よ百如えらく達の世　三松
仲之丁茶の弁ハ二歩なり　シイト
法くよりもあハれ拵子の笑顔　硯川
上ニ下ニで屁賛いてるまぎやゝ　仝
屋人も三ヶ也義里ゝ多迷流メ　シイト
一人割る狸子ハかいあだ志ようん　和森

柳巴七七五

茶の山を毎ニ拵く志ろ拵ハ　玉春
鶴石の三ヶ巳ッあるハいてたびや　友真
ど、ハ知ゝず歩や鮫ゝや猫まよよ　阿布
上ニ下モニ三人扶拵ぐ法藤入り　ヤマキ
モのゆハ文茶りよ縁をらみ　鶴山
虎五疋鶴一疋で留を元り　三松
北玉の元石を百只一　猪　万仁
人間じかゝすなの級ところ　仝
豆柄ぐ拵ぐ拵光沓石ニ如ゝへ　玉春

ゆふ指をでよれぐこ作り声　砾川
人を薬よして山門の言上り　松雀
まつ白くなろてたたくく石臼や　梅多
おまへだらやれたまれ茶ぢの茶ぢの　田布
鶴の枝豆ハ豆腐で味ゆだろう　一徳
おぐらのつらも学うしのよう　砾川
掛ぶる法ゆりの言三舎目　青蘇
源三位首ハけたまの家をよみ　砾川
孝行を仕て長子洋がつき　万仁

山桜を一ツおつぺすと赤老　砾川
自然ハいん豆よハ近たされ　ヤマキ
敵山で春盤ながめるふ〳〵やつ　香良
笑ふておゆぬ乳をにぼ子ハ蔵り　砾川
一疋のるぢ法来ゆる豆せる　万仁
酒ものめも志ろ鯉ハ子のな　砾川
什松ぢちまち梁ハ切らの面白さ　ヤマキ
月をすてる菊へ老秀うかと好き　古左
浮て麿紅葉で長子乳ぢそれる　万仁

かぐらの雪よ降逆のそくく　孤雲
二千軒石橋山のたぢむよ　瓢箪
おどり子ハ路道のかげをいつも愛　里松
けいせいよ情夫いせやよ池松哀　ヤマキ
唐詩選切りよするあイ出象　於雀
金時のまいそくよ寝るかー、麻　青狸
おかー、も泣へいい嬢の下モづり　百化
やぼうりを志さこふえへね仲の子　久遠
月がさめて今ハあざなれ入おくろ　ヤマキ

そこれうとなく去ているひまなる色　於雀
ごハ版もるあへず舞逆てもり　ヤマキ
時さふりが迎ふで来さを元逆　砥川
ちりが雷およそ二寸こいするより　仝
星の鉦指ゑッさのゾ下サちまん　仝

文日堂評

三笑ハ四角なる函で丸く誠ミ　青嵐
波濤の左手よ打るかまり川ぞ　雪尾
時雨をながめ社ふを出かり　百夕
千載へたぐのりたる桃色さ　箕山

なるねこもそりを作る玉あも　　接好
庵の姿うしろをとぎた　　シノト
紙紙あつて山吹あしてえせ　　万仁
たてきでをしてほし姿星へ　　青嶽
子をたてよ如庵王位のそむく　　玉事
日の苦をまつち山へと久こへる　　巾布
蕗橋よ前のたぞこ八まつ八事　　梅思
りあ八まぞ白いとたりやへを入り　　巾布
戸原の紫まうれる出れて　　梅思

抑ヒナセノ花八

あ星をすてく名玉巷よ光り　　孤雲
氣がれ八ま氣をねりまの山よ吹り　　玉事
稼ち摩紅氣で墓子氣ぶを行る　　万仁
紙附よ小乃よ蕗て医老よなり　　シノト
二十新不橋山のすじむうあ　　瓢瓢
ちねんなく越んでいるヒト老ぶ　　シノト
ちうちんよつうがねを吹く教氣仏　　物雀
目が見て今八ぶなれ入ぶ白ろ　　ヤマキ
おかしくも此イ八流の下モかぶり　　万仁

ちこんやむつかしいと橋子共　内布
係あつふかしねぐしく　如雀
たびくのふぎ者多うてる　仝
よくにをたくをもつてたいこ打　百々
かの一子あが梅ようもいく茶　仝
小使を投打よ犬の走出の打　半尾
つかけよりもてもおれ相撲下女　里松
四七人場の外と一向げさねこ　和泰
もんもしよ下女誹しよりを解き　仝

柳軍四五八

將よこがハ泣きものを犯後ずいま　孤雲
床来がらるよ千里の鞍　青蔵
武義ゆハあるかも農斗りこ　仝
雀ヶ園援制くを繰て出る　シノト
千載へ右衣なしある者くしんさ　其山
仍れの弦でも一曲を姫をせ先　硯川
法ゆづけかくる住者をいはめる　仝
山吹ハごの左かすぬをトえへ　百々
たくのいて子供をつれて孫梅来ん　青蔵

梅雨のさいそくまるかゝ八幡　青柳
鑑賞のうちで女子八幡の月　シノト
大木戸より屋敷ぬけてまいる　仝
指折よつりかねをきき扶長仏　北雀
寧戸より四あていろく森見ぶや　横好
彼岸ハも姫をしら〳〵月をながめ　仝
たいこ打ぶ〳〵をうゝ也て浮をうき　里松
ぶんおハ高人まの間へ裏が茅ゝ　ヤマキ
三十よまるやまうねを女子入れ　百夕

梅の方がゝ丁ぶ来ゝを丸通ゝ　砾川
高の道こゝ井ノ子ま佐ひのきゝ　仝
こハ版もゝ行のへす鞍通てゝ　ヤマキ
辛丸の現屋おれをなんさこ子　砾川
ぬけハぬけさぶすん食ゝ坊主成り　仝
松もゝたよよくびいをゝあゝ　寒嘉
児ケ渕いゝれを変てゝがゝめ　砾川
青ハまゝ松井かゝゝみあゝけて　仝
江のゝさめを行ているへんさつゝ　仝

かきやゝがれ油さし　めが上ざくり　碓川
然かへり　そんを　ちらんこ　指ヲなげ　仝
云なづけ　この子　ずこ　不せ　おきぬ　のが　仝
居ちもそ　そ　ろく　ハ　同が　迎り　仝
はし　さ　ないち　ぎりと　ハ　不せ　ぬ　ぬ　ぬ　シツト
従一位　ヨ　暴　迎　ま　る　道　ち　く　其山

帝　奥　撰　歌　崔　歌　松井　梅　五歌

川柳評

ちゑ　祥　迎　を　メ　よ　ち　の　法　同　訂　安裏

柳　四十二　二　冊　一

大ちのお　迎　ヨ　在　の　ち　在　し　頃　と　青歌
ちょ　ち　さ　ち　ち　ハ　な　ん　ぶ　ご　梅　の　茶　仝
畠　で　在　を　え　つ　さ　の　ハ　ち　ち　ち　百仁
ま　ち　老　人　ち　ち　よ　ち　ち　す　る　謙　ま　き　ん　市都
け　い　せ　い　の　ち　ち　ぐ　ち　よ　歌　ハ　舎　る　く　青歌
梅　や　ー　き　た　イ　ま　れ　ず　ご　ま　子　ず　れ　久歌
ち　ち　ご　の　梅　を　恒　根　ヨ　村　芝　在　梅彩
ち　だ　ち　れ　さ　ま　き　ま　井　ノ　子　二　三　女　玉亭
除　参　ル　を　下　ち　せ　ま　貝　と　ち　も　つ　て　る　梅彩

青山霧坪

巖を伝ひくだりて谷をのぼり
帰路して渡のいらくを云ふ
江戸ハ和の国なれでハ梅て帰
かく年シよ松淋しき西国
何ン冊ッ拾よ我ますこ和尚
用おなさハ第ト力のえかハし
天空の下なれで日本の坂を下り

巾布
碎川
百化
ヤヤキ
碎川
接好
シイト

蓑を笠かぶりくるを勇士拵
仲の子おさまるさとつうまり
毛氈へ魚鱗花裏高ゑかづら
うるすりで洗毛をするのをしき
三合用ゐいろの角でをてるん
なんのこのの〇ふいねけめト大北云
既のれ比ハ侍るのすへつるさ
たんへハ洗袋をみやげん
北いこ拵南川よまちのハせ

仝
巾布
箕山
如雀
碎川
里拵
百化
シイト
玉峯

耳子目をぶらさげ牧文鬼を嘘　礫川

芸者で二人かけおす紅葉焼　里松

九錦をぬぐと昆門のぬけかゝり　やまき

中かがいこまるものかと井戸ほり　礫川

飾りやせんちかと娘のおへなき　雨夕

ちッぱしの歩をつゝくおくけちな顔　礫川

雨やどり他生の縁へこしをかけ　仝

梅へ屛風をたてまはす十三日　玉章

一歩すて牡丹めしき駐かへり　礫川

指てさやつがらぜんじそ出来ョリ　やまき

手がで文銭を剃る斎の牛ウ　礫川

此がでの椽好きのいたくみがへ　仝

つまやはそのをいまないで五孫とい　雨夕

けむつたい祝文湯や株三ッ指子　横好

何ぞ娘生れつゝかない目で笑イ　玉章

慈の器りゃ咲て居る恥しさ　礫川

文日堂評

六月の布子ハ天へもちつき　州崖

二十四童恒根へ善をとゆるゝ　青鶏
江戸八幡の宮恒で八梅で帰　百仁
用事なゝ八前と力の元かハ　横好
蔵より菓ハ大ゝばな相がゝり　卿雀
相がゝ海毎でめくゝもゝろさ　仝
大社排へ紅葉むすびつけ　沖布
下くなゝバ志ゝ猪ゝ五田山　未浮
恵好ゝ伯ゝとなても春るやつ　百夕
吉鶏の御ゝ逝てゝふをと　仝

柳亭地ノ巻四

厠の所ニ島子ゝねをゝかるゝ　蜀尾
恵喜ハゝんでゝやゝの一味ゝ　百仁
十恒ゝ十二ひゝくゝでゝゝ志あり　百夕
こつちゝへ恵岡なゝんゝの厠白さ　やゝキ
天空の下紅でゝ日本の恒を下り　ゝ仆
立ッ文字ハ四久子の祝ゝ青てゝれ　横好
琴の音のせねゝづ嫁ハ相撲ゝ　ゝ仆
すがゝまで恵花の恵を見せるゝ　香夕
鋏ゝ恵ぎゝまゝよゝべゝゝ口をゝけ　横好

泊瀬をにべなく与謝ヤン上ニ
沼元もない美を入るたうら舟　郷雀
くもつゝで岩を鐘をかけてゐる　仝
舟縁ちの一寸相ハ土俵　ちり　仝
逢の沼び底ハ岩ゆてゐるところ　紙雲
仲の町かゝさきるさまこつろ　巴山
仲人が来て田を山ゝ結ひ直　巾布
市ゝ稲を志ゞり　一の坂鳥海　百メ
鏡書を雪るハ島子ト　紅葉や　巾布
　　柳屋七七　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　未浮

不の月をりつけられる山の芋　や美
三今月一歩下さんやあよがあり　郷雀
かへて居るのよるへね人ぶこ云ヒ　万化
笑かゝハみすゝ帝をきひ迷　青鶴

川柳評

清左男市道も義も男屋キ　巾布
清の中ハ月すれ画で名のうさ　碓川
千金の清男ゝあぶ月い浮世こ　巴山
晩の九ハ八億月の末つかさ　万仁

志かりしてのちをかんがへねりこめる　　郷雀
えゝれいこと云のもつぶし行燈　　友裏
蕎麦を秤よりかけてえんめん　　砥川
仲の町あのさきるまとつゝ引　　巾布
義経ハげよ源トの九郎人　　友裏
妙キ者てけ下落へ島子捧る　　シケト
太的と義三へ一ホよ左を咱ち　　未浮
けひつゝい祝又鬼や操三ッ拍子　　横好
梅ハ亀をつまんで下紅をさし　　ヤマキ

御せんたく帖六

松でも活元日ナー毎日く　　戎尾
なんの竹のくゝいぬけめト大ぜ云　　湿松
こゝ高くしまし田ぶ丸で踐りあけ　　青嵐
脳成り前者つけんの中よんを　　巾布
毋ムろう姫おしなこへよ成り　　玉亭
祝者をうるハ島子ト紅子や　　未浮
中かゞいこまるぶかゞ井戸を協　　砥川
やゝ竹つて又切れ麦をよんでる　　仝
まの竹りさくのをえて八地獄左　　仝

せきと笑ふ栄て笑をハあく城へ　友惠
六枝をバ大きゝ仏でうま上ん　長尾
寿命もくもがたと　ぼうぐ　青嶺
九鈴をねぐと昌のねけさゝ　ヤマキ
市喜ハえっぐく茶の一味ん　百仁
焼版ハこつちのものと居れ　ヤマキ
鉢かへりかまへふ〳〵〳〵　徳川
下ゆう多かるを指おまへめる　き嶺
六枝ぶりつけられる山の芋　ヤマキ

毒を喜ぶれもぶてくな拍を拍ち　箕山
京奥　上地　浅茅生　西川吉京

川柳評

此人俗よ表の上ゝ市下　白　巾布
上地の茶ちゝ代あづまのひへおろ　百々
仁王門をのかく鯛のまたところ　蛸雀
をれとなくまて茶やゝ尼金へ　箕山
大門をたいるとこれハ〳〵ん　仝
まり磯色んかん堂て蛇　をなで　青嶺

今去空新きぬぐ〜ハ多山の雪　シ下
ちゝ吞見一ツ山のメくり　志毒
切りかける扶夫ハちんけん猪頁く　仝
ホ川へひつふの男ハちよまでゆき　玉孝
ホ川の拝ひどこやゝ毛ゝ〜ず　シイト
ホ川へちぐ〜通ひををゆ　玉孝
飯盛のあよ新武ハまろいこと　孤玄

柳多留拾遺　三十八

○俳諧風書品目録　江戸上野山王之藤　花屋蔦次郎

俳風柳樽撰上冊　川柳点句洞時代多四季恵新好事議作者部与

同川傍柳　森川柳点句　同やちゝ盤　森川柳点句

同柳句程笛之連　柳篇　江戸五文字柳点句独点者点句自筆句　押絵者

黄[illegible]

同筆墨　元吏庵生寿自撰句集　江戸山王

同百之事　鹿角亭雖芭信

俳諧[illegible]